

第4節 アンケート結果の分析から考察する重点課題

1 小学校教育における重点課題

(1) 小学生の基本的な特徴

- ・ プラス回答が90%以上のものを列挙してみます。基本的な指標とも言える学校生活については、90%の児童が肯定的に感じていることがわかります。また、学校生活を支えている親しい友人（友人関係）は、97%の児童が「いる」と答えています。協調性についても、92%の児童があると認識しています。このように顕著な項目以外にも、アンケート結果に見られる小学生の意識は多くの項目でプラスの傾向が見られ、意欲的・積極的な子ども像が浮かび上がってきます。
- ・ 学校生活で自分を発揮できている（自己存在感）と回答したのは47%で、学校生活が充実していると回答した児童のほぼ半分でした。学校生活の様々な場面で、子どもたちは自分の存在を十分発揮できていないと感じていることがうかがえ、自己存在感に関わる課題があるといえます。特に家庭では71%の児童が、自分を「発揮できている」（家庭での自己存在感）と回答していることから、この落差は学校教育の在り方を問うものであると認識する必要があります。
- ・ 子どもたちの自然活動体験についての結果を見ると、56%が「よくする」「する」と回答しています。この数値をどう受け止めるかについては評価の分かれるところですが、より多くの子どもたちに自然体験を享受してほしいという思いから、わたしたちは子どもたちの自然体験はまだ不十分であると考えました。一方、ボランティア体験活動に関するプラス回答は52%となっていますが、年齢やこの体験の特質からみて、児童が主体的に活動することにはむずかしい側面があると考えます。
- ・ 感性についての項目は、39%の児童が「感動したことがない」と否定的に回答しており、小学生らしい感性を磨くことも大切になってきます。
- ・ とりわけ感性をはぐくむ土壌となる自然体験が重要になってきます。体験は、「生きる力」をはぐくむ宝庫といっても過言ではありません。子どもたちの周囲から自然が失われつつある今、総合的な学習などで自然体験の機会を設定することが必要であると考えます。
- ・ 思いやりの面でも課題があります。「困っているのを見たときどう思うか」については、身近な人が対象となる場合は「助けようと思う」が53%、「場合によって」という条件付きが43%となっています。身近な人を対象にした回答としては、やや低い割合ではないかと考えます。思いやりの心は、相互のかかわりを大切にする中から生まれるので、実践力を子どもたちに育てることが望まれます。また、「自分をがまん強いと思うか」（耐性）について聞いた設問についても、プラス回答は44%で、他の項目と比べたとき、低い割合といえます。

(2) アンケートから考える小学校の重点課題

- 1 他者とのかかわりの中で、互いを認め合う力を育てる。
- 2 自ら考え、主体的に行動し、問題を解決していく過程を大切に、自己存在感を感じることのできる機会を設定する。
- 3 人、地域、自然、とりわけ小学生段階では自然とふれ合うことのできる場や機会を設け、多様な体験を通して豊かな心をはぐくむ。

2 中学校教育の重点課題

(1) 相関から読みとることのできる特徴

「学校生活の充実」と「友人」「学習内容」「自己存在感」「自己表現力」の間に強い相関関係は見られません。これらの因子とは関係なく「学校生活は楽しい」とする回答が多数を占めています。

「生命尊重」と「自尊感情」とが共に低いために、課題をもつ生徒（生命を軽視し、自分らしさに確信が持てない不安定な生徒）が他校種に比べて多く見られます。

「（他への）思いやり」と「自尊感情」が共に低く、「自他を大切にす思いやり」の気持ちが十分に成熟していない様子が見られます。

「自己存在感」と「自尊感情」「自己表現力」「向上心」「進路」の間にも強い相関関係は見られません。「十分に自己を発揮できていない」という思いが強いことは、中学校がそのような場となっていないことをうかがわせます。

「協調性（他と協調できるか）」が高く、「適応力（自分らしくふるまえるか）」が低いことは、自分をおさえてでも他と協調していくことを優先する傾向を示しているものと考えられます。

(2) 中学生の基本的な特徴

- ・感性が著しく高まる時期であり、自分のこととともに、他者の視線を気にする傾向が強く現れています。しかし、他方自我の確立が未だ不十分なため、確固とした自己存在感がもちにくい状況にあります。また、他者との比較の中で自分を低く見る（自尊感情が低い）傾向もあり、この傾向は他と生活を共にする学校生活において、特に顕著です。
- ・年齢に応じて耐性や規範意識等の社会適応力が次第に成長してくる中で、自分らしくふるまうことの困難さ（適応力の低さ）を感じている生徒が多くなっています。協調性が比較的高いことも考え合わせると、周りとの協調を優先し、自分の感性を適切に表現することをひかえている生徒が多いのではないかと考えられます。
- ・生命尊重・思いやりの低さは、他者理解の未成熟さの現れと見ることができます。耐性や規範意識という、社会性を支える基盤が十分に成熟していない様子が見られます。

(3) アンケートから考える中学校の重点課題

- 1 自己の感性を安心して素直に表現することのできる場を設定する。
- 2 家族や友人などの親しい人だけでなく、社会一般のさまざまな人々と触れあう中で、他の個性を認め生命尊重や思いやりの心をはぐくむ。このことは社会貢献意識の低さを克服するためにも重要である。
- 3 真に他者を尊重するためには、その基盤となる自尊感情や自己肯定感をさらに高める。

3 高等学校教育における重点課題

(1) 高校生の基本的な特徴

- ・プラス傾向の回答が9割以上を示すものとして、思いやりと向上心があげられます。ただし、思いやりに関しては「場合によって助けようと思う」との回答が、親しい人に対しては48%、一般の人に対しては63%を占め、状況により判断力しようとする傾向が見られます。また、向上心の強い生徒は61%を占め、現状に満足することなく向上したいという姿勢がうかがえます。

- ・プラス傾向の回答が8割以上を示すものとして、**友人関係、身辺自立、社会貢献、責任感、進路**があげられます。「ボランティア活動など、広く社会に貢献できることをどう思いますか」という設問への回答として、「とてもよいことだと思う」が43%、「よいことだと思う(44%)」との回答も含めると、高い値となっています。生徒の社会貢献に対する意識は十分にあることから、体験活動重視へと発想の転換を図ることや、社会貢献活動の場を設定し、積極的に支援することが必要と考えます。また、体験活動は、責任感をさらに向上させる機会ともなります。「高校生になってから、自分の進路についてじっくりと考えたことがあるか」という設問には、「ある」「時々」を合わせたプラス傾向の回答が81%となっています。この進路への意識を、自己の在り方生き方にかかわらせ、進路選択の能力を一層高めることが必要です。
- ・プラス傾向の回答が7割以上を示すものとして、**生命尊重、自己表現力、適応力、耐性、規範意識、感性**があります。
- ・一方、マイナス傾向の回答が4割以上を示すものとしては、**ボランティア活動体験、攻撃性、自然体験、自己存在感(学校・家庭)、学校生活、自尊感情**があります。自然に親しむ活動や遊び、ボランティア活動や地域での活動といった体験活動の不足が顕著に現れています。しかし、社会貢献をよいことだと思う意識が高い(88%)ことから、高校生活では「気持ちがあっても、きっかけ(契機・機会)や場がない」という現状もうかがうことができます。高校生としての在り方生き方を考えたとき、学校生活(楽しくない13%)、学校・家庭での自己存在感(自分を発揮できていない:27%・23%)、自尊感情(自分のよいところがわからない40%)、攻撃性(よく当たりたくなる:52%、わからない:14%)に対する指導の在り方が、今後の課題となります。

(2) アンケートから考える高等学校の重点課題

- 1 家庭、地域、学校生活におけるさまざまな人間関係の中で、自己を発揮できる力を育てる。
- 2 自ら考え、他と話し合い、行動することを通して、自己発見・自己決定できる場を設定する。
- 3 体験的活動の機会や場を企画・設定し、個性や生きる力をはぐくむ。

4 重点課題と研究の方向

校種別に考察してきたアンケート結果を再度全体として見た場合、【生活全般】に関する項目では自然体験やボランティア活動体験の乏しさ、【自己の確立と社会性】に関する項目では自尊感情や学校生活における自己存在感の低さ(特に中学校と高等学校)などが、子どもたちの回答からも教師の回答からも共通に浮かび上がってくる「生きる力」にかかわる課題です。さらに、教師を対象とした「豊かな心を育むために必要な取組」についての回答では、家庭・地域を含むあらゆる教育の場における「心の教育」の充実の重視とならんで、様々な体験的活動の必要性が最も多くあげられています。以上のような子どもたちの意識や実態、また、教師の意識からも、これからの学校教育が「豊かな心」を基盤とした「生きる力」の育成を目指して行なわれなければならないことが明らかになったものと考えます。

同時に、校種別のアンケート結果の違いから、小学校・中学校・高等学校段階のそれぞれの特徴や課題も明らかになってきました。自己の実現と社会性の確立は、教育が目指すべき最も

根本的な目的ですが、その目的の実現のためには、それぞれの発達段階における子どもたちの課題を捉えておくことが必要です。平成10年7月に出された教育課程審議会最終答申は、この発達課題に沿って学校教育が果たすべき「各学校段階の役割の基本」について総括的に述べています。本研究にかかわって注目したいのは、

小学校段階では、「社会生活を営む上で必要とされる知識・技能・態度の**基礎**を身に付ける」と同時に、「自然や社会、人、文化などの対象とのかかわりを通じて自分のよさ・個性を**発見する素地**」を養うこと

中学校段階では、「社会生活を営む上で必要とされる知識・技能・態度を確実に身に付け」とともに、「**自分の個性の発見・伸長**を図り、**自立心**を更に育成していく」こと

高等学校においては、「**自らの在り方生き方**を考えさせ、**将来の進路を選択する能力や態度**を育成する」とともに、「**個性の一層の伸長と自立**を図ること」

が、それぞれの学校段階の役割として示されていることです。ここには、個の確立と社会性の獲得を目指しての、それぞれの校種における積み重ねの必要性が示されているほか、それぞれの発達段階において特に重視すべき課題があげられています。つまり、子どもたちの成熟の度合いや認知能力の段階に応じて、小学校段階では「**自然や社会、人、文化などの対象とのかかわりを通じて自分のよさ・個性を発見する**」ための活動が、中学校段階では「**自分の個性の発見・伸長**と「**自立心**」の涵養を促す活動が、そして高等学校の段階では、「**自らの在り方生き方**」の自覚と「**進路選択の能力**」の育成を目指す活動が求められているということです。

本研究は、「豊かな心を基盤とした生きる力」の育成に資することを目的としていますが、その方法として、上に述べた活動をより具体化することを出発点として、主題に迫ろうとしました。そして、それは同時にアンケート調査の結果にも示されている、これからの学校教育の課題に応えるものとなると考えます。研究の内容としては、小学校では体験的活動を中心とした「総合的な学習」の在り方について、中学校では「自他を大切にしたい自己表現」の在り方について、そして高等学校では「在り方生き方考える進路指導」の在り方について焦点を当てました。以下では、これらの活動の在り方について具体的に考えることを通して、「豊かな心を基盤とした生きる力」の育成の方法について考察してみたいと思います。

【参考資料】 児童生徒を対象とした調査結果の傾向

全体に高い値を示す項目	友人関係 身辺自立 向上心
全体に低い値を示す項目	自然体験 ボランティア体験 自己存在感（学校における） 思いやり（一般の人に対して）
校種が上がるごとに高い値を示す項目	自己表現力 耐性 規範意識 向上心 攻撃性
校種が上がるごとに低い値を示す項目	学校生活 学習内容（の理解） 友人関係 ボランティア体験 自然体験 自己存在感 正義感